

## 展示室1「人間像」パネル 1/8

### 言葉を観る、美術を読む

言葉は、私たちの社会には欠かせないものです。頭の中で何かを考えたり、誰かと会話したり、大事なことを書いて記録したり…。言葉は生活のあらゆる場面に、様々な形で現れて、重要な役割を果たしています。

本展では、私たちにとって重要で身近な言葉と、美術とのつながり、その中でも「美術作品における言葉」に注目します。当館所蔵作品の中から、言葉と関わりのある作品を選び、「サイン」、「名前を記す意味」、「言葉と美術の総合をめざして」、「生活の中の言葉を描く」、「大衆社会と美術—ポップアートと広告デザイン」、「言葉で伝えるメッセージ」の6グループに分けてご紹介します。

言葉と美術の関係に注目することは、言葉そのもの、美術そのものについても、いつもとは異なる角度から考えてみることにつながります。本展が、言葉や美術の新たな一面に気付くきっかけとなれば幸いです。

\*会期中、展示替えを行います。

### Viewing Words, Reading Art

Words are essential to our society. Whether we are thinking in our minds, conversing with others, or writing down important information, words appear in various forms and play a vital role in all aspects of our daily lives.

This exhibition explores the connection between art and words—which are so important and familiar to us—focusing specifically on "words in artworks". Drawing from our collection, we have selected artworks related to words and organized them into six sections: Signatures; The Significance of Inscribing Names; Toward a Synthesis of Words and Art; Depicting Words in Everyday Life; Mass Society and Art: Pop Art and Advertising Design; and Messages Conveyed Through Words.

Examining this relationship allows us to consider both words and art themselves from a fresh perspective. We hope this exhibition will provide an opportunity to discover new aspects of words and art.

\*Some works will be rotated during the exhibition period.

## 1. サイン

初めに取り上げる言葉は、「サイン」です。美術に関する言葉の代表例ともいえるでしょう。美術作品では頻繁に目にするものですが、だからこそ普段はあまり注目していないという方も多いかもしれません。

一口にサインといっても、様々な個性が見られます。例えば板東敏雄のサインは、アルファベットと漢字の組み合わせです。フランスで活動し、日本的な静けさが漂う作風が人気だった彼にとって、漢字は、作品の日本らしさを際立たせるための戦略でもありました。また椿貞雄の作品に見られる、背景の壁に文字を刻むようなサインは、北方ルネサンス美術の影響を示しています。サインには名前だけでなく、作者に関する様々な情報が含まれているのです。

泉茂や絹谷幸二の作品のように、一見どこにあるか分からないほど、作品の表現に馴染むように記されているサインもあります。それぞれ、どこにどのように記されているか、探してみてください。

また、絵画以外の作品にも、もちろんサインは見られます。ここではその例として、ジョルジオ・デ・キリコ作品介绍します。サインは大きく彫られており目に入りやすいですが、その字体は彫刻全体の雰囲気と調和しています。

## 2. 名前を記す意味

ここではサインと関連させて、名前が記された作品を集めています。しかしどれも、書かれているのが「作品で取り上げられている人物の名前」であるという点で、サインとは異なります。

山下菊二と篠原有司男は、どちらもある人物を、名前とともに描いています。名前は人を識別するうえで重要です。名前を知ることが、その人を知ることにつながります。作品に名前を書いているのは、描かれているのが誰か認識させたい、その人のことを知ってほしいという、作者の気持ちの表れともいえるでしょう。

〈ミノトールの死〉は、日本におけるピカソの影響を、象徴的に表した作品です。「ピカソ」という文字は、元はピカソ本人が書いたもので、この作品がピカソに関するものだと示すと同時に、「ピカソ本人が書いた日本の文字」であることによって、ピカソと日本をつなぐ記号としても機能しています。

太田三郎の作品は、第二次世界大戦における中国残留孤児の人々を取り上げています。日本人として生まれながら、中国人として育てられ、中国人としての名前を持つ人々です。「私は誰ですか」というタイトルの通り、名前と自分自身との関係は、実は不確実であることを示しています。

### 3. 言葉と美術の総合をめざして

ここまでは美術における「サイン」や「名前」について見てきました。ここから、言葉と美術のかかわりについて更に掘り下げるために、次はヴァシリー・カンディンスキーの『響き』をご紹介します。この作品は今から100年以上前に、言葉と美術の「総合」を目指して制作されたものです。

『響き』は、詩（言葉）と木版画（美術）から成る詩画集であり、カンディンスキーが目指したのは、詩と版画という異なる芸術分野を総合することで、詩画集全体が一体となるような作品でした。

そのために彼は、言葉と美術を「純粋な要素」に分解します。言葉は発音やリズムに、美術は色や形に分解されると、それらの純粋な要素同士は、芸術のジャンルを超えて影響し合います。そして詩画集全体がまとまって、一つの「響き」を生み出すのです。今回展示しているページでも、形が単純化され、色も赤、青、黄に限られているからこそ、それらの純粋な要素が持つ力強さが感じられます。

また今回は、1910年代にカンディンスキーと共に活動した、パウル・クレーの作品も合わせてご紹介します。彼の場合は、美術に音楽の理論を取り入れました。そしてその作品は、自由な線がリズムを作り出し、いくつもの音が音楽を構成するように、様々な色彩の組み合わせが画面を形作っています。

他分野の芸術を美術に持ち込んだ彼ら二人の表現を、是非見比べてみてください。

#### 4. 生活の中の言葉を描く

美術作品の中には、私たちの生活の中の言葉を捉えたものもあります。ここでは、そのような作品に注目します。

三宅克己や廣島晃甫（前期展示）の作品では、海外の風景を描いた中に、そこに実際に書いてあったであろう文字も描き込まれています。文字があることで、風景を細部まで写し取ろうとする作家の姿勢が感じられると同時に、その文字が外国語であることで、作品やその風景が持つ異国情趣をいっそう引き立てています。

それに対して、石丸一、伊原宇三郎、大沢昌助の作品では、画面のどこを見ても、言葉が形を持って登場するわけではありません。それでも、何かを書いたり読んだりしている人物の姿を通して、間接的に言葉の存在を感じることができるのではないのでしょうか。美術と言葉の関係は、必ずしも文字のような形がなくても、成り立つことが分かります。

作品の中の人物が、どのように読んだり、書いたり、話したりしているのか、想像してみてください。

## 5. 大衆社会と美術ーポップアートと広告デザイン

「大衆社会」は、大量生産・大量消費やマスメディアの発達が特徴の社会です。そこでは人々が、大量の商品やサービス、そしてそれらを売るための広告に囲まれ、それらを次々と消費しながら暮らします。

そして大衆社会化が進む 1950～60 年代に流行した芸術運動が、「ポップアート」です。ポップアートでは、世の中に出回る大量生産された商品やイメージ、記号などが作品に取り入れられました。

ここでも、ロイ・リクテンスタインはコミックの一コマ、メル・ラモス（前期展示）は広告によくある「女性と商品」の組み合わせ、ジム・ダイン（後期展示）は街中の落書きのような雑多なイメージを用いています。どの作品にも文字が見られますが、その文字本来の意味は重要ではありません。文字が本来の意味から離れ、イメージの一部として溶け込み、消費されることが、大衆社会のあり方を象徴しているといえるでしょう。

同じく大衆社会の中で発達したのが、広告です。今回は、広告デザインから出発した作家、横尾忠則の作品をご紹介します。デザインの一部であると同時に、情報を伝える役目を負っているポスターの文字とは対照的に、絵画作品に書かれた文字は、意味を読み取るのが難しく、それによってむしろ、作品に謎めいた印象を与えています。

## ポップアートの源流

ポップアートのように、世の中に流通するモノやイメージを作品に取り入れる手法は、実は第二次世界大戦前から使用されていました。特に、「ダダイズム」や「シュルレアリスム」といった芸術運動では、既製のモノやイメージを、時にそのまま、時に組み合わせて、作品として提示する例が多く見られます。ここではまずそれらの作品を、雑誌の図版を通してご紹介します。

その次に紹介するロバート・ラウシェンバーグは、「ネオ・ダダ」と呼ばれる、ポップアートに影響を与えた戦後の芸術運動の中心人物です。今回展示する作品では、雑誌の切り抜きを組み合わせしており、戦前の芸術運動と手法のうえで共通していることが分かります。

こうした手法は、日常で見かける素材を作品に取り入れることで、芸術と日常の境目を曖昧にし、「芸術とは何か」「何が芸術で、何がそうではないか」を問いかけてきます。ポップアートもまた、そうした系譜を引き継ぐ運動であるといえます。

## 6. 言葉で伝えるメッセージ

言葉の本来の機能は、何かを「伝える」ことでしょう。本展の最後に、言葉の「伝える」機能が重要な役割を担う作品をご紹介します。

マルセル・デュシャンは、通称「大ガラス」と呼ばれる作品の制作メモ等をまとめて、一つの作品として提示しています。初めは、美術作品には見えないでしょう。しかしデュシャンにとっては、作品を制作する過程も芸術であり、その過程を示すこのメモの集まりもまた、れっきとした作品なのです。

デュシャンとも親交のあった荒川修作の作品は、文字や記号で構成されています。いわゆる「普通の」絵画とは違う見方をする必要がありそうです。荒川はあえて文字や記号を用いることで、作品の意味を読み取ろうとする人が、それまでの物の見方や考え方を問い直し、新しい視点で思考するよう、促しています。

二人の作品とは対照的に、広告デザイン出身のバーバラ・クルーガーは、短く、分かりやすい言葉を選びます。そのため、彼女の言葉はある種の宣言のように、力強く鑑賞者に届くのです。

アルフレッド・ジャーの作品に出てくる言葉も短いですが、こちらは印象が異なります。“It is difficult”（難しい）というシンプルな言葉は、作品それ自体が難しいという意味にも取れますし、ぼやけた後ろ姿の女性が置かれた状況に関することとも考えられます。本展の最後に、言葉を手がかりとして、この作品と向き合ってみてください。

## 展示室1「現代版画」パネル1/3

### 現代版画

人間像と並ぶ、当館のもう一つの具体的な収集テーマが「現代版画」です。写真や印刷などのテクノロジーの発達は、私たちの暮らしはもちろんのこと、20世紀以降の美術をとりまくビジュアル文化を大きく変えてきました。今の時代の美術をとらえるとき、「現代版画」はすぐれた切り口になると思われます。

今年度のこのコーナーでは、様々な鑑賞の観点から、版画の魅力を探っていきます。

|             |            |
|-------------|------------|
| 4月11日－5月10日 | ハンガはメディアだ  |
| 5月12日－6月7日  | ハンガ、色彩の魔術  |
| 6月9日－7月5日   | ハンガそれは生の刻印 |

|            |           |         |   |
|------------|-----------|---------|---|
| 7月11日－8月2日 | 絵をみて、そうぞう | きこえる音は？ | 1 |
| 8月4日－9月6日  | 絵をみて、そうぞう | きこえる音は？ | 2 |
| 9月8日－9月30日 | 絵をみて、そうぞう | きこえる音は？ | 3 |

### Contemporary Prints

Tokushima Modern Art Museum maintains a wide-ranging and high-quality collection of contemporary prints made by Japanese and overseas artists. Printmaking constitutes a very important category within modern and contemporary art, and has been practiced not only by dedicated printmakers but also painters, sculptors, and artists working in other mediums.

Printmaking is media: 4 April - 10 May

Printmaking, magic for colors: 12 May - 7 June

Printmaking, it's the mark of life: 9 June - 5 July

Let's imagine from the picture. What sounds come to mind?

1st term: 11 July - 2 August

2nd term: 4 August - 6 September

3rd term: 8 September - 30 September

## 絵をみて、そうぞう きこえる音は？

耳をすまして、絵の中から音をさがしてみましょう。

最初の絵には、きこえてきそうな音の例が吹き出しに書いてあります。どこにかくれている音かさがしてみましょう。こたえはひとつではありません。自由に想像してみてください。

2つ目から先の絵のとなりには、音さがしのヒントがあります。

人や風景に注目したり、色や形から連想したり。絵を作ったときの様子を思い浮かべるのもおもしろいはずです。

音をさがしていると、絵がいきいきと動き出したり、絵のことがちょっとわかったような気持ちになったりするかもしれません。音さがしをきっかけに、絵をみる楽しみが広がれば嬉しいです。

絵の中にかくれていそうな音たち

- ・人や風景の様子からきこえる音
- ・色や形のイメージからひろがる音
- ・描いたり彫ったりして絵を作ったときの音

## 大人のみなさんへ —— 抽象的な絵を楽しむヒント

ここから先、コーナー後半には、少し不思議な、抽象的な絵が並んでいます。

「どう見たらいいのだろう？」と戸惑ったときは、ヒントとして、絵本『もこ もこもこ』を手にとってみてください。「ぱちん!」「ぷうっ」「しーん」といった言葉と絵が響きあう、赤ちゃんから大人まで夢中になれる絵本です。

美術館にならんだ絵をみるとき、赤ちゃんといっしょだったら、どんな音でお話ししますか？ 形を何かに見立てたり、色から連想したり、作者の手の動きを追ったり。音の強弱や高低、スピードを想像するのもおもしろいかもしれません。おとなりの絵で、練習してみましよう。

自分なりの見方で自由に楽しんでいい。音さがしの旅が、鑑賞に関する安心や自信を持つきっかけになれば幸いです。

## 徳島ゆかりの美術「同じ主題/変化する描き方」

当館では、徳島にゆかりがある作家の作品や、徳島の風景や風物に取材した作品を収集しています。

今回は「同じ主題／変化する描き方」というテーマに沿って、一人の作家が描いた同一テーマの作品を比較し、その表現の変遷を辿ります。本展では、清原重以知(1888-1971 年)と伊原宇三郎(1894-1976 年)の二人の作家に焦点を当ててご紹介します。彼らの作品に見る変化の背景には、一体何があったのでしょうか。

### Art and Artists Associated with Tokushima “The Same Subject/ Evolving Styles”

The Tokushima Modern Art Museum collects works by artists associated with Tokushima Prefecture, and works inspired by views and subjects unique to the area.

This exhibition is presented under the theme “The Same Subject / Evolving Styles.” By comparing works on the same theme created by a single artist, we trace the evolution of their artistic expression. This exhibition focuses on two artists: Shigeichi Kiyohara (1888–1971) and Usaburo Ihara (1894–1976). What exactly lay behind the changes evident in their works?

## 清原重以知

清原重以知(本名：重一)は、1888 年、現在の阿南市下大野町に生まれました。東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科を卒業後は、光風会や文展、帝展、新文展、日展などを舞台に作品を発表しました。

その画風は、時には時代や社会と密接に関わり合いながら多彩な変遷を遂げていきます。初期には黒田清輝らの外光派表現を思わせる表現や、緻密な細密描写、色彩豊かな装飾的表現などさまざまな試みを展開しました。昭和に入ると筆触を活かした人物像を描き、さらに戦時下という緊迫した時代を迎えると、東洋的な精神性を感じさせる重厚な世界を描き出しました。

そして戦後は、おおらかなタッチと鮮やかな色彩の世界へと向かい、晩年には自宅の庭や静物など身近なものを画題としながら、美術界の流行とは距離を置いた画境へと至りました。

今回は、清原の作品の中から、特に「静物画」と「自画像」をご紹介します。

### 清原重以知による静物画

1920 年前後の日本美術界では、後に「大正期の細密描写」と呼ばれる絵画が大きな潮流となりました。対象をひたすら緻密かつ克明に描くことで、物がこの世に存在することの不思議さや神秘感を浮かび上がらせようとするものです。岸田劉生らによって始められたこの手法は、洋画・日本画の枠を越えて美術界全体の流行となりました。〈果ら〉【ルビ：か】を見ていただくと、清原もこの流行を強く意識していたことがよく分かります。

〈パイプのある静物〉と〈人形のある静物〉は制作年不詳ですが、大正から昭和へと時代が移る頃の作品だと思われます。そこには、生真面目な写生のなかに、色鮮やかな果物の華やかさが同居する魅力があります。

戦後になると、〈青りんご〉に見られるように、パレットナイフを多用した、おおらかなタッチで対象を捉えるスタイルへと変化していきます。身の回りにある果物をただ純粋に楽しんで描いているかのような、軽やかさが感じられます。

### 清原重以知による自画像

〈知命図〉は、52歳の清原の自画像です。挙国一致の国策を推進する一助として、文展の代わりに開催された「紀元二千六百年奉祝美術展覧会」に出品されました。

タイトルの「知命」とは、天から与えられた自身の使命や運命を悟ることであり、転じて「50歳」の年齢を指す言葉でもあります。天命を知ることなのか、あるいは50歳という人生の節目を捉えた自画像なのか。いずれにせよ、そこには何かを悟り、自らの身を引き締めるような強い意志が込められていると言えるでしょう。

当時、美術界では戦争記録画が大きな奔流となっていましたが、清原が正面を切ってそれらを描くことはありませんでした。また、年齢的にも戦地へ赴くことはありませんでした。しかし、それだけに本作には、戦争の時代を生きる彼なりの静かな覚悟のようなものが、その姿勢や服装から深く表されているといえます。

79歳頃に描かれた〈自画像〉は、〈知命図〉同様にまっすぐこちらを見つめる画家自身が描かれています。手には筆とパレットが握られています。激動の時代の中で絵画と向き合い続けた清原の、静かな情熱がその眼差しに静かに宿っているようです。

## 伊原宇三郎

伊原宇三郎は、1894 年、徳島市秋田町に生まれました。東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学。在学中から帝展入選を果たすなど、早くからその実力が認められていました。卒業後、1925 年から約 5 年間フランスに留学しました。留学中は、当時パリで大きな注目を集めていた「新古典主義」と呼ばれる時期のピカソをはじめとする同時代の表現に強い影響を受けると同時に、西洋の伝統的な絵画理論と技法を深く研究しました。

帰国後は、古典的な雰囲気が漂う量感あふれる裸婦像を次々と発表し、帝展で受賞を重ねます。そして、ヨーロッパで培った絵画理論や技法を日本に根付かせることに大きな功績を残しました。また、戦後には日本におけるピカソ・ブームの原動力となったほか、さまざまな美術界の重要職を引き受け、戦後日本美術界の復興と発展を力強く牽引しました。

今回は、伊原の作品の中から、特に「静物画」と「裸婦像」をご紹介します。

## 伊原宇三郎による静物画

伊原がパリに到着した当時、ピカソは新古典主義の作品と併せて、これまで取り組んできたキュビズムの作品を並行して制作していました。伊原はピカソのキュビズム作品を繰り返し模写しています。〈ピカソ作《楽器、ポルトの瓶、ギター、ランプ》の模写〉は、現在確認されている 15 点の模写のうちの一作です。その中でも際立って大きな画面を持ち、額装して晩年まで自らのアトリエの壁に飾っていたことから、伊原にとって特別な思い出のある一枚だったと言えるでしょう。

〈白い壺のある静物〉と〈窓際の静物〉も同じく渡仏中に描かれた作品です。これらは模写ではなく伊原自身によるオリジナルであり、キュビズムの技法が巧みに取り入れられています。

時代は下り、65 歳頃に制作されたのが〈アトリエ〉です。日展の評議員となった伊原が同展に出品した本作には、彼が追求し続けた安定感のある構図と、量感のある表現が遺憾なく発揮されています。また、背景には画中画（画面の中に描かれた絵画）として、自身の〈横臥裸婦〉（世田谷美術館蔵）と思われる作品が描き込まれており、空間の広がりを感じられます。

## 伊原宇三郎による裸婦像

伊原は、東京美術学校で藤島武二の教室に学びました。初期の作である〈鳥と女〉は、学校を卒業する前後に描かれたものです。装飾的な画面の中に、柔らかい雰囲気が感じられる作品です。

その後、約5年間にわたるフランス留学へと旅立ち、ピカソの「新古典主義」の洗礼を受けることになります。〈座れる裸婦〉には、ピカソだけでなく、その追従者の一人であるジャン・スーベルビーの作品を意識したものとの見方もあります。現地の多様な同時代美術を貪欲に吸収していた、試行錯誤の跡が窺える作品です。そうした研究の最初の到達点となったのが、1928年のサロン・ドートンヌ出品作〈白衣を纏える〉です。古典主義的な本質を捉えた本作は、伊原の渡仏時代における記念碑的な作品となりました。

帰国後、伊原は渡仏時代の作品を帝展に出品して特選を受賞しました。さらに〈榻上二裸婦〉【ルビ：とうじょうにらふ】で通算3度の特選に輝きました。彼がフランスで習得した厳格な構図法や、豊満な四肢の量感表現は、日本の洋画界に本格的な西洋の絵画観をもたらし、次代の表現を切り拓く大きな原動力となったのです。